

[原著論文]

戦後最初の社会科地域副読本と思われる 『わたくしたちの港区』の内容と価値

寺本 潔

要 約

第二次世界大戦後の新教育としてスタートした社会科の内容を大きく左右したのは、児童が生活する身近な社会から題材を選択することであった。このため、指導に当たって教師たちは独自の教材を自治体ごとで開発しなくてはならなかった。今日の小学校3・4年の社会科が地域学習と称される所以である。このルーツを探り、当時の教師たちがどのように模索しながら教育内容を整備していったのかを明らかにしたい。調査の結果、戦後最初と思われる社会科副読本を港区で発見したのでその内容を報告し、現場レベルにおいて初期社会科の一端を解明したい。

キーワード：初期社会科プラン、樋口澄雄、交通の学習、公共の学習

1 はじめに

(1) 社会科の誕生と本研究の背景

日本の社会科が第二次世界大戦後にスタートしたことはよく知られている事実である。とりわけ、首都である東京地区においては、占領軍の中で教育政策に関与する部署であるCIE（民間情報教育局）による教育文化に関する指示もあり、いち早くアメリカの占領地教育政策が現場に普及していった。

社会科は新教育のいわばスター教科として注目され、全国の教師によってその内容や指導方法が模索され始めることになる。そうした中で日本の小学校教師によるコア・カリキュラム運動は、それまでの忠君愛国思想を基調に知識を注入し、教科書を覚え込ませるような戦前・戦中の教育の反省に立ち、児童の生活圏における直接体験を題材に、日常生活課程として教育内容を組む問題解決学習を基調にしたものに大きく転換しつつあった。また、全国各地の教師たちが、地元の教材を開発し、「為すことによって学ぶ」「話し合いによって民主的な合意を形成する」というジョン・デューイの教育思想に触れた時期でもあった。

社会科に限って言えば、交通や上下水道などの生活の基本的なしくみである社会資本（社会基盤整備）がいかに自分たちの生活に役立っているか、娯楽や福祉の公共的な施設が市民の文化的生活の向上にいかにか不可欠であるか、農業や工業などの産業が働く人々の工夫や努力の元で発展してきていること等を「ごっこ活動」や「構成活動」「劇化」などを通して追体験することで、社会を成り立たせているのは市民一人ひとりであること、市民の合意と発展への努力によって、民主的な社会が実現できることを体験を通してつかませたいと願う教育課程が模索されていた。

このため、地域の題材を事例にしながら学習させていく必要性が高まり、いわば地元立脚型の手づくりの教育課程として全国的なブームをもたらし、各地に社会科を中心とする学校カリキュラムが作られるようになっていった（これらに関しては平田嘉三編『初期社会実践史研究』教育出版センター、1986年発行が詳しい）。

いわゆる初期社会科プランの全盛期である。戦後の教育史の上でも川口プランや桜田プランは有名であり、それらに先立って昭和22年1月26日に桜田小学校において公開された日下部しげ教諭による社会科授業「郵便ごっこ」は日本最初社会科授業として報道されるなど、各方面からの注目を集めていた。

昭和22年5月に小学校学習指導要領社会科編（Ⅰ）が刊行された（諸般の事情から9月に社会科だけ実施がずれ込んだが）。児童が生活する地域の社会事象をダイレクトに扱う必要性が高まり、社会機能としての様々な公共の働きや交通、仕事とくらしの果たす役割に関する内容が一層重要視されるようになった。

しかしながら、当面は全国一律で使用される文部省による検定教科書が必要とされ、『土地と人間』『村の子ども』など8冊が出そろうまでやや時間がかかることになる（詳しくは、片上宗二著『日本社会科成立史研究』風間書房参照）。

昭和25年前後は、おそらく戦後復興への熱き思いが小学校教師たちを突き動かしていき、自分たちの手で社会科の内容を作り上げたいという動きが高まっていったものと思われる。その結果、現場教師からの要望もあって市町ごとの地域色豊かな内容で編集された社会科地域副読本が求められるようになっていったと思われる。

（2）本研究の目的

本研究の目的は、全国の小学校教師たちが、新教育の具体化に尽力していた昭和25～30年頃の指導内容をより具体的に把握するために、その手掛かりとして地域ごとに作成された社会科地域副読本を紐解くことによって解明することである。おそらく新教育の開始が早かった東京都や京都市でいち早く副読本も作成されたと思われるが、当時の予算上の制約もあってガリ版刷りによる印刷もあり、装丁も簡素なため、県立図書館や教育センター図書室などにおいて、今日まで保管されている事例は多くない。あっても、昭和30年代後半からの版が大半であり、

昭和20年代発行の副読本の発見には困難が伴っている。題目に「戦後最初と思われる」と記したように今後に資料発見の期待を込めておいたことを付記しておきたい。

今回、本研究を思いついたきっかけは、全21巻にも及ぶ『日本地誌』（二宮書店）の口絵写真を担当し、地理写真家で著名な石井實氏の足跡（戦後直後に港区神明小学校の教師であり、当時社会科副読本作成に関与）を追いかけていた際に東京都港区教育センター所蔵図書の中から発見した『わたくしたちの港区』（資料1参照）が予想以上に発行年月日が高いことから、半ば偶然にこの研究を思い立ったわけである。文部省から発行され、活字として広く普及した教科書やその指導書と異なり、社会科地域副読本は地域限定の編集・発行であるため、自治体の図書館や教育センターにおいても必ずしも保管されておらず、散逸している例も多い。このため、前述したように日本で最初に手づくりの副読本が現場教師たちの努力で作成された事実を系統的に追いかけることは困難である。本論文を発表することによって、この種の資料の発掘が促進されることを願いたい。また、明治図書（株）の樋口雅子氏には御尊父である樋口澄雄氏に関係する貴重な資料を拝借させて頂いた。記して感謝の意を表したい。

2 樋口澄雄による編集

当時、港区の桜田小学校において桜田プラン（日常生活課程、問題解決課程、技能習熟課程の三つのコースでカリキュラムが構成）の作成に関与していた樋口澄雄氏が、西桜小学校校長時代に手がけた仕事が、社会科副読本の編集作業であった。

『わたくしたちの港区』（資料1参照）は昭和28年6月25日に発行されたが、その「はしがき」には次のような一文が記されている。

「みなさんも港区に住んでいながら、港区のことについて知っていることが少ないようです。よその国の川の名前は知っていても、アメリカのようすの話はきいていても、自分の家の前に流れている川の名を知らなかったり、自分たちの区のようすを知らないですごしがちです。それもそのはず港区のようすを知りたいと思ってもちょうどそれにつごうのよい本がありませんでしたから。そこで港区全体の小学校の社会科の先生方が集まったとき、小学校の子どものみなさんに港区のことを研究するのによいたすけになるような本をつくったらどんなによいかわからないという話がでました。そこで先生方が力を合わせて作ったのがこの本です。（後略）」

まさに、子どもたちのために、地域の社会事象を扱いたいと願う教師たちによって作成されたことが伝わってくる。

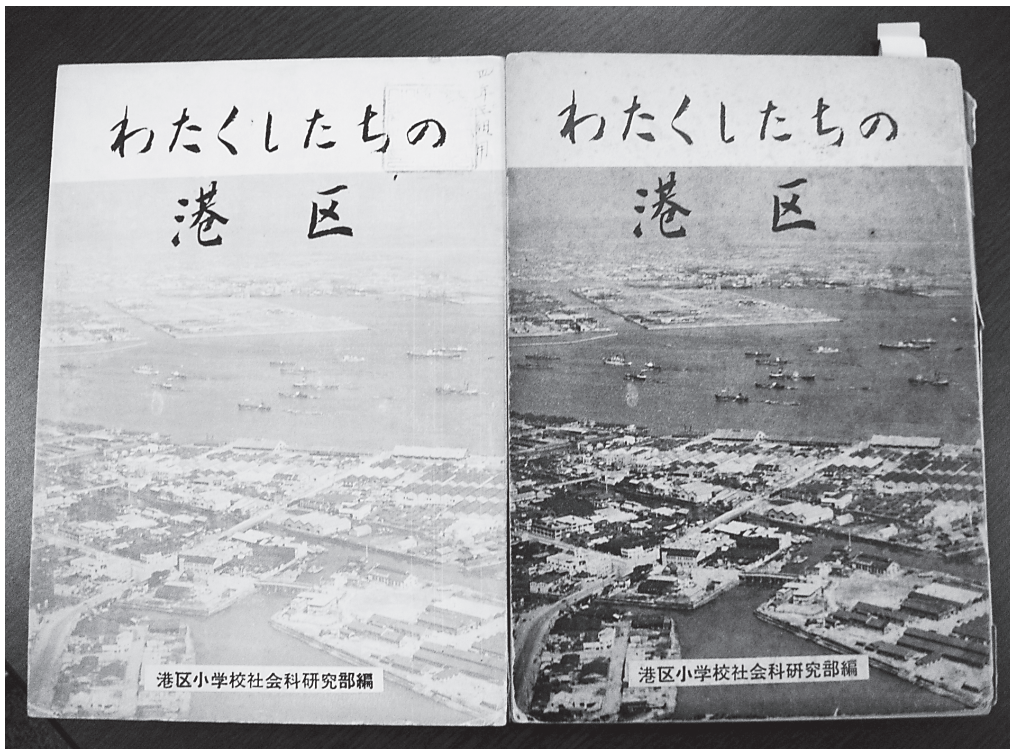


写真1 『わたくしたちの港区』（昭和28年版）の表紙写真

3 『わたくしたちの港区』の内容と価値

(1) 昭和28年版の内容

構成は以下のようにになっている。

はしがき

(一) 港区のすがた

一 港区の位置 二 港区の地形 三 港区の気候 四 港区の人口と面積 五 港区のうつりかわり

(二) 上水と下水

一 水道と昔の上水 二 下水の今と昔

(三) 陸上の交通

一 道路 二 交通機関の発達とまち 三 交通と私達の生活

(四) 東京港と汐留駅

一 交通と運輸 二 汐留駅 1 お店と市場と駅 2 汐留駅の見学 三 東京港 1 東京港のあらまし 2 貨物船の輸送量 3 これからの東京港

(五) 港区めぐり

(六) 埋立地と工業

(七) 学校と役所

(八) レクリエーション

一 港区にあるレクリエーションの場所と設備

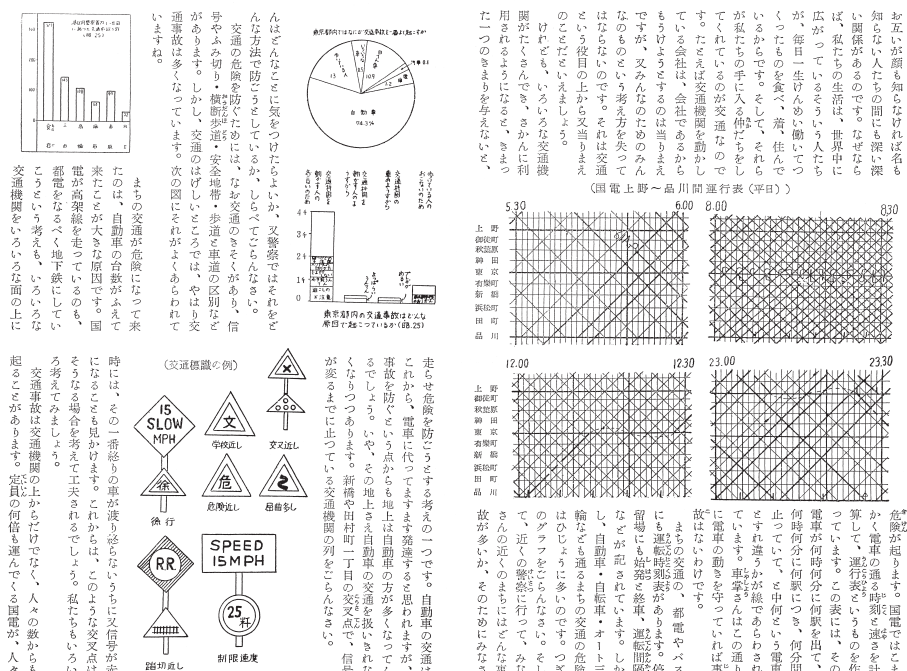
二 設備の利用

(九) 病院と保健所

あ と が き

全96ページ。

『わたくしたちの港区』（昭和28年版）は構成を見ても判明するようにやや解説書的な内容で児童には難しい印象を与えていた。実際の内容について、代表的なページを資料2に紹介したい。占領時のアメリカ式の交通標識や国鉄のダイヤグラム（上野―品川間の運航表）も挿入されており、時代を感じる内容である。地図（分布図や駅構内図）や統計（乗降客数や都会の工場数の棒グラフ）、挿絵（江戸時代の高輪大木戸）、景観写真（渋谷駅や青山墓地）などが随所に挿入され、大人が読んでも十分に価値ある内容になっていた。例えば、下水処理場の解説文では、「高級処理　それでも、くさりやすい物が水中に含まれているので、こまかい石をし



きつめた、濾床（ろしょう 池のようなもの）の上に第一沈殿池から水をまいてこします。これを山水濾床とっています。」(p24) というような専門的な箇所もいくつか見出せる。小学3年ないし4年にとっては難解な解説文であった。

しかし、一部にはよく工夫された文章もある。それは汐留駅の箇所である。「このごろぼくたちがよくたべるみかんがどこからはこばれてくるのかをしらべてみることにしました。二年のとき町のお店しらべをしたことを思い出して、くだものやさんへいきました。お店では、オート三輪車で、築地の市場でみかんをし入れてくるのだと、おしえてくれました。どの店でも、同じ築地からし入れをすることがわかりました。お店にあるみかんの箱にはってあるレッテルをみて、ぼくはみかんが西南日本のあたたかい九州や和歌山・静岡・広島などから送られてきたのだということがわかりました。」(p42)

おそらく、桜田小学校から近い汐留駅を扱った実践を積み重ねてきた経験知がこの工夫に反映しているものと思われる。しかし、昭和28年版は全体としては児童にとっては難しい内容と受け取られたようだ。実際の使用に当たっては児童の理解力などの面からふさわしくないとの意見が出されたことが容易に推察できる。この後、翌昭和29年7月に全面的な改訂版が編集されるからである。改訂版の発行にあたり、当時の港区教育長の吉田正人氏による「港区の児童の皆さんへ」の一文に「自分の郷土である港区を知るために港区の小学校の先生方が『わたくしたちの港区』という本を昨年作って下さいましたが、作られてから一年の間先生方はもっとよい本にと色々と研究されて、新しく作りなおされてこんなよい本が出来ました。」とある。

つまり、現場教師の熱意によって作られた副読本であったが、実際は使いにくい内容の本になってしまったことが推察される。

(2) 昭和29年版の内容

次に、昭和29年版の代表的なページ（四 道とのりもののやくめ の冒頭）を資料3に紹介しよう。文字もいくぶん大きく、写真や図版が大きめに入っている。また、「〇〇さんたちのグループの発表」という記述箇所もあるように児童自身が調べたような記述にもなっており、記述スタイルの点では今日の社会科教科書の雛型とも言える編集の工夫が見られる。

昭和29年版の構成は以下の通りである。

はしがき

一 港区のしぜん

(一) 港区の坂

(二) 高い土地、低い土地

(三) 谷と川

四、道とのもものやくめ

ますから、横だんにはとてもきけんです。
下のような道は、たいてい家からわりあい近い所にあり



京 浜 国 道（札の辻）

上の写真の道は、東京から地方へ行っている大きな道です。国で作った道なので国道（こくどう）といえます。京浜（けいへん）国道（こくどう）というのは、東京と横浜の間の国道で、一号国道とも呼ばれています。ここは、トラックや自動車がたくさん通ります。遠くから来るもの、遠くへ行くものが多いので、スピードをだして



住宅地に近い商店まち（二本榎通り）

— 54 —



住 宅 地 の 道（青山五丁目）

（一）いろいろな道
ここに六まいの写真が出ています。どれも、港区にある道をうつしたものです。しかし、同じ道でもずいぶんようすがちがっています。あなたの家や学校の近くで、この中のどれかと、よくにている道を見つけてください。
上の道は、学校へ行く時、遊びに行く時、買物に行く時つとめにゆく時、しじゅう使われる、家のごく近くの道です。夜はさびしく、雨やしもどけの時はぬかるみになります。しかし、のりものはめったに通らないので、私たちの遊び場になることもあります。こういう道についてうたった歌を知っていますか。

— 55 —

資料3 『わたくしたちの港区』（昭和29年版）の内容の一部

- （四）むさし野台地
 - 二 人びとのしごととくらし
 - （一）店のしごととくらし
 - （二）工場にはたらく人々
 - （三）おつとめの人たち
 - 三 公共施設のはたらきや人々の共同活動
 - （一）ちず子さんたちのグループの発表
 - （二）わたくしたちのグループの発表
 - （三）あきらくんたちのグループの発表
 - 四 道とのもものやくめ
 - （一）いろいろな道
 - （二）道とまちはたらき
 - （三）道のやくめ
 - （四）東京港
 - （五）のりものはたらき
 - （六）交通じこ
- 全76ページ。

昭和28年版に入っていた上下水道の施設や病院と保健所などの記述は無くなっている。「港区のしぜん」と「人びとのしごととくらし」「公共施設のはたらきや人々の共同活動」「道とのりもののやくめ」の4つの章から大きく括られ、平易な記述に書き換えられたのである。おそらく、昭和28年版のやや難解な記述を改め、全体としてページ数も減らし、資料2と3を比較しても分かるように文体、1ページ当たりの文字数も変えるなど平易化に努めたことが伺われる。

4 「あとがき」にみる当時の教師の努力

まさに手作りの副読本編集であったようだ。『わたくしたちの港区』(昭和28年)の「あとがき」には次のような一文が書かれている。

「この本のことをはじめて話し合ってた、かれこれ一年近くになります。大ぜいの先生方の共同のしごとであったことや、おいそがしい先生方が、日曜日のお休みをさいて研究して下さったので、しごととはそうたやすくは進みませんでした。(中略)特に次の先生方には執筆やら編集、写真の撮影と一方ならぬご苦勞をおかけしました。厚くお礼を申し上げます。さらに石井先生の写真には汐留駅の鉄塔のてっぺんから駅の様子を、又市具や駅前の様子を東横デパートの塔の一ばん上から半分からだをのり出してとったというような、ほんとにいのちがけのものがありますので、みなさんといっしょに心からお礼を申し上げます。編集の主任は西桜小学校長樋口がさせて頂きました。十分の出来栄えにならなかったことを私の力不足をおわび申し上げます。(樋口)」

今日においても地域副読本の編集作業は業務というよりは、編集委員長である地域の校長からの依頼事項であり、現場教師の半ばボランティアによる作成と言ってよい。当時、青年教師であった石井實氏の自宅に保管されているワープロ打ちの回顧文によれば、この副読本の編集作業については、休日はもちろん、平日さえも取材に出かける許可を勤務校の校長から得て自転車で港区内を走り回り、写真を撮影したことが綴られている。日本の復興を願って、小学校の教師たちが手づくりで社会科の内容を組み立てていった努力は忘れてはならない戦後教育のひとつまではないだろうか。

『わたくしたちの港区』は発行後1年を経てすぐに全面的な改訂が施されたとは言え、日本の社会科実践史に忘れることのできない作品といえそうである。

本発表では「日本最初と思われる」と表現したように、もしかしたら昭和28年6月より、さらに時期的に早い手作りの地域副読本があったかもしれない。もし、仮にこの本が日本最初であるならば、今日各地の自治体で編集されている『わたしたちの〇〇市』などの地域副読本の雛型になったと思われる。桜田プランの実践とは異なるもう一つの初期社会科実践史として筆者は注目している。なお、本研究は、2011年10月に北海道教育大学にて開催された日本社会科教育学会大会にて口頭発表した。

戦後最初の社会科地域副読本と思われる『わたくしたちの港区』の内容と価値

参考文献

片岡龍一著『教育文化叢書 社会科単元展開の実際』教育文化出版社発行，昭和25年，201ページ。
桜田小学校編著『桜田の教育 第一集』桜田小学校発行，昭和26年，104ページ。

The Study of Social Studies Supplementary Reader Thinks to be the Beginning is Expected After World War II

Kiyoshi TERAMOTO

Abstract

The purpose of this research is to examine the first subject of the social studies.

I found a supplementary reader as the first subject of the social studies.

The teachers of the elementary school had an effort, and a book was written.

This book was made by the teacher's zeal. I compared the supplementary reader issued in the 28th year of Showa and the 29th year of Showa. Ideas are seen by these books in the description. The contents of the book changed in the contents which were easy for a child to understand. We must not forget the thing of this book in the history of the Japanese education.

keywords : Early social studies, Sumio HIGUCHI, Learning of the traffic, Learning about the public society.